

魯迅は「私の失恋」をなぜ『野草』に 編入したのか^[1]

伊藤徳也

論文摘要：魯迅「私の失恋」は、当初「某生者」署名で『晨报副鐫』に投稿されており、「魯迅」署名で『語絲』に投稿された『野草』の他の詩篇とは根本的に異質な作品だった。「私の失恋」は徐志摩の林徽因への失恋とその傷心を表出した失恋詩《去罷》を冷笑したものだったが、そこにはさらに自作をメタレベルから冷笑する衝動も働いていた。「不周山」以来、自身の中に自作冷笑衝動があることを自覚していた魯迅は、徐志摩の著述や言動に反発する中で、「私の失恋」のような冷笑を、雑草（野草）魂を表現するものとして肯定し直し、「私の失恋」を『野草』に編入した。魯迅の“油滑”もこの自作冷笑衝動に由来するのではないか。

キーワード：魯迅、「野草」、「私の失恋」、徐志摩、林徽因、“油滑”

一 はじめに

魯迅『野草』の第四篇「私の失恋——古い作品に倣った新しい戯れ歌〔我的失戀—擬古的新打油詩〕」（本稿ではこれを「私の失恋」と略称）は、研究者を含む多くの魯迅愛読者をずっと困惑させてきたと言ってもいいのではないだろうか。例えば片山智行は詳細な注釈を連ねたあげくにこう記している。

作者にはそれなりに自負するところがあったにちがいないが、この詩はからかいが先行して、深みが伝わらず、もひとつ奥行がわかりにくい^[2]。

木山英雄の『野草』論（1963）は、創作主体としての魯迅内部に想像の触手を伸ばし、『野草』というほぼ百年前の中国語テキストの魅力を今も触発し続けているが、第四篇の「私の失恋」には言及していない^[3]。そのほぼ四〇年後に書かれた木山の注釈においても、「私の失恋」は一言も触れられていない^[4]。丸尾常喜は片山智行同様『野草』全編に対して注解を付けているが、「私の失恋」に対して、片山のようなネガティブな表現はないものの、「アイロニー」や風刺の「広さ」や「反発力」を点評するだけで、『野草』の他の詩篇のような深い迫力を内蔵しない「異色の詩」という位置づけである^[5]。

見るべき中文の解釈書として、孫玉石のものが二種類（1982、2001）ある^[6]が、「私の失恋」に対し、「それは『野草』の優美な形式の中で、ある種不調和な感じを人に与える」（1982）とか「この唯一の、風格が全く違う『野草』」（1982）と評している。藤井省三『魯迅事典』は、『野草』最初三篇の「彷徨感覺」と第五、六篇の「激しい復讐の情念」の間で「転調」が図られているとするが、孫のこれらの捉え方と認識を共有していると言えよう。孫の、より端的なコメントとしては、

魯迅がこの戯れ歌を書いたのには確かに大して深奥な意味があったわけではない〔魯迅写作这首打油诗确实也并没有太多深奥的含义〕（1982）

この「古い作品に倣った新しい戯れ歌」には実際何ら深い微言大義があるわけではない。〔这首“拟古的新打油诗”实在并没有什么幽深的微言大义〕（2001）

といった断言もある。これらの孫玉石の評語は、片山や丸尾の婉曲な物言いを直言したものと言えるだろう。彼ら先達のことばに共鳴する魯迅愛読者は少なくないのではないか。

「私の失恋」という詩篇は、魯迅あるいは『野草』を大づかみして論ずる上で、核心を外れた取るに足らないもの、あるいは、不可解で異質なノイズとしてあり続けてきたと言っていだろう。実は、この詩篇の発表のされ方も、他の『野草』の諸篇とは顕著な違いがあった。

他の『野草』諸篇はすべて「魯迅」署名で最初から直接『語絲』に投稿されたが、「私の失恋」だけは「某生者」という署名でまず『晨報副鐫』に投稿された。結局掲載を拒否されて、その後結局『語絲』に「魯迅」署名で「野草」の第四篇として発表されることになるのだが、九月中に脱稿されていた『野草』第一篇から第三篇までは、二ヶ月程度魯迅の手元に置いておかれたのに対して、一〇月三日に脱稿された「私の失恋」はすぐ一〇月中に『晨報副鐫』に投稿されている。こうした点から、魯迅本人も、当初は「私の失恋」を前三篇とは異質の作品だと考えていたことが窺える。

魯迅が「野草」という総題で明確に自分の連作を発表していこうと考えるようになるのは、おそらく、早くとも一一月一七日の『語絲』創刊号に発表された「ことばにならない[説不出]」（“野草”語初出文）を書いたあとのことで^[7]、一二月一日の『語絲』第三期に第一篇の「秋夜」が「野草」の一つとして発表されることで初めて、「野草」の名のもとに連作を書き継ぐ魯迅の意志が明らかにされる。そうなる前の一〇月に早々と『晨報副鐫』に一旦投稿した「私の失恋」を、結局魯迅は『野草』の中の一つとして一二月八日の『語絲』に発表した。特に深遠な意味がない単なる「からかい」ならば、単発で発表してもおかしくはない。魯迅はいったいなぜこの異色作「私の失恋」を敢えて『野草』の中に編入したのだろうか。本稿ではこの謎の解明を試みる。

二 魯迅と孫伏園の証言

まず「私の失恋」が最初に『晨报副鐫』に投稿された時のことを、魯迅本人と『晨报副鐫』の編集担当者であった孫伏園の証言に基づいて確認しておこう。

魯迅は孫伏園の晨报社辞職と絡めて、一九二九年末に以下のように記している。

彼〔孫伏園：引用者注、以下同様〕が言うには、その留学生〔当時『晨报副鐫』代理総編集であった劉勉己〕は彼が外出している時に乗じて植字室に行って私の原稿〔「私の失恋」〕を抜き取り、そのため諍いが生じて辞職せざるを得なくなってしまうということらしい。しかし私は別に腹は立たなかった、というのはその原稿は三段の戯れ歌で、タイトルが「私の失恋」、当時「ああ、ああ、私は死にそうだ〔阿呀阿唷、我要死了〕」といった類の失恋詩が盛行していた^[8]ので、意図して「彼女が去るに任せてはどうだ〔由她去罷〕」で終わる一首を作って、からかってやっただけだからだ。その詩は後にまた一段を足して、『語絲』に載せ、さらにそのあと『野草』に収めた。（「私と『語絲』の始終」^[9]）

「私の失恋」は当初三段で『語絲』に掲載する時に一段足したと記されているが、多くの先行研究で指摘されている通り、この詩篇は後漢の張衡「四愁詩四首」の構成を模倣したパロディだから、もともと四段でないとおかしい。また、魯迅が言う「彼女が去るに任せてはどうだ〔由她去罷〕」という決定的な詩句はまさにその第四段目の最後に付けられているので、当初三段で『語絲』発表時に第四段を足したという魯迅の言は、そのままは受け取れない^[10]。

孫伏園の晨报社辞職の具体的な経緯は、それまでにすでに孫伏園「京副一週年」（1925）^[11]において公表されていた。それによると、校正の済んだ当日の原稿の中から、劉勉己が、直接の編集担当者である孫に断ること無く、「私の

失恋」は「[[ひどくて]ほんとうに我慢できない[實在要不得]]として抜き取り、他の原稿に差し替えたのである。劉はなぜ「私の失恋」が「がまんできない」のか説明できず、憤激した孫は劉に手を上げてしまい、そのまま晨報社を辞職することになった。直接の編集担当者が印刷に回した原稿を上司が差し替えたのだからそれ相応の理由があったはずで、この場合それは「私の失恋」の内容に深く関わっていた。

三 孫席珍の証言——「私の失恋」と徐志摩、林徽因との関係（一）

一九七七年九月に書かれ翌年に発表された孫席珍「魯迅詩歌雑談——魯迅先生の数首の詩を読んだの些かの感想と体得」^[12]は、「私の失恋」について次のように断言している。

一言で喝破すると、この詩は遊戯的筆法で書いた風刺詩で、風刺の対象は『現代評論』派の幹将徐志摩である。

さらに、孫席珍によれば、徐志摩は「高貴な紳士」達と交際する中で「高貴な華南の名家の某女士」と知り合って、夢中になったが、家柄が釣り合わず挫折し、「一日中泣き面をして『ああ、ああ、私は死にそうだ』といつまでも騒いでいた」ので、魯迅は「私の失恋」を書いて皮肉ったと説明している。「高貴な華南の名家の某女士」というのは、福州人である林長民の娘林徽因に他ならない。林長民は中華民国建国時の政治団体いわゆる研究系のリーダーの一人であり、梁啓超等とともに講学社を設立した政治家であり、旧体詩の詩人としても知られていた。孫席珍が言う「高貴な紳士」達というのは、林長民の他、梁啓超等の研究系や講学社の人士達のことであろう。張勳の復辟の後、梁啓超や林長民等研究系の人士は段祺瑞内閣の要職を占めたが、段祺瑞が下野したあと、活動の場を政界から学術や文化界へと移し、一九二〇年に講学社が設立された

際には、董事会に梁啓超の他、汪大燮、蔡元培、熊希齡、范源濂、林長民等が名を連ねた。徐志摩の家も父徐申如が実業家として成功していたので、裕福な商家なのだが、林家や梁家よりかなり格下の家柄だと当時は見なされたらしい。

孫席珍のこの文章の他の部分には、誇張した表現が目立ち、また、ここに引用しなかった「私の失恋」の細部の解釈には牽強付会とも思えるような叙述も多く、疑義を呈した論者も複数いる^[13]。とは言え、魯迅のごく近くで一九二〇年代の北京の空気を吸って活動した彼の実際の見聞に基づいた証言であって、根幹的な部分は十分傾聴に値する。おそらく以上のような内容を、大枠では魯迅も認識をほぼ共有していたであろう。

その三年後に孫が書いた「魯迅先生は如何に私達を教え導いたか」^[14]には、彼にしか書けない以下のような情景が活写されている。

一九二四年春のある午後、陳大悲、錢玄同と魯迅先生は、期せずしていっしょに孫伏園先生の『晨报副刊』『晨报副鐫』事務室にやって来た。該刊の校正係として、私はちょうど伏老〔孫伏園〕と会う用事があって、事務室の入口まで来て、中を望むと、軽率に入っていくのは具合が悪いと思って、外で立って適切なタイミングを待っていた。魯迅先生がちょうど九斗卓〔引き出しが九つのテーブル〕に向かい、伏老が普段座る回転椅子に座って、静かに煙草を吸っていて、陳大悲と伏老が壁際の茶卓の両脇の椅子に座り、錢玄同だけが立って議論をしているのが見えた。彼が「徐公を『詩哲』と称す以上は、某某女士はむしろ『詩華』と称すかあるいは『詩娃』と呼ぶべきだろう。」と言うのが聞こえたと思ったら、私が入口に立っているのをちらっと見て、私が立っている方へ手を上げ、続けて「その彼も『詩孩』と呼んでもかまわない。」と言った。彼がそんなふうに言い出すので、みんなが振り向いて私の方を見たが、陳大悲は声を出さず、魯迅先生は「えっ？」と言ってから「むしろかまわない。そればかりか、非常に適

切だ。」と言った。私はこの機に乗じて入っていき、伏老に一言二言報告をし、その後彼らに個別に挨拶をして退室した。次に彼らが何を話したのか、私ももう聞いているわけにはいかなかった。

この一節は、孫席珍が「詩孩」と呼ばれるようになった由来を説明した文章の一部である^[15]。『晨报副鐫』を編集する孫伏園の下で校正係をやっていた孫席珍は、一九〇六年に生まれ、この時一八歳、錢玄同（三七歳）や魯迅（四三歳）から見れば、子供に見えたかもしれない。錢玄同のセリフの中にある「詩哲」はむろん徐志摩、「某某女士」も林徽因以外ではあり得ない。この一節の直後に孫席珍は、その数日後の北京大学の教師控室での情景を以下のように伝えている。

数日後、北京大学の教師控室で、何人もの大先輩がいっしょにいるのを見かけたが、その中の一人が劉半農で、彼は私を見るとからかってこう言った。「おっ、『詩孩』が来た、何か鑑賞できるいい詩を持ってきたか？」その時私はまだ若く、はにかんで笑うだけで、何も返事ができなかった。しかし私は、この呼び名が北京の文芸圈の中ですでに相当広く伝わっているということを知った。

以上から、魯迅が、徐志摩と林徽因の関係についての議論に耳を傾け、かつその議論に加わっていたらしいこと、『晨报副鐫』事務室や北京大学教員控室等の場で、「北京の文芸圈」での話題が、ゴシップめいた話も含めて、さかんにやり取りされていたらしいことがわかる。いったん徐志摩の林徽因に対する失恋というゴシップが「北京の文芸圈」内でほんの少しでも囁かれていたのなら、魯迅の耳に届いていても全く不思議はなかったのである。

四 孫伏園、陳源の認識——「私の失恋」と徐志摩、林徽因との関係（二）

孫席珍以上に、当時の魯迅の執筆を近くで見守り、頻繁に魯迅と接触していたのは孫伏園である。孫伏園は当時すでに前述の「京副一周年」で「私の失恋」と自身の晨報社辞職事件の関係を説明しているが、その時は魯迅同様、徐志摩と林徽因の件には言及していない。しかし、彼らに言及した伏園の証言を間接的に伝える資料が他にある。陳漱渝「魯迅はなぜ『私の失恋』を書いたのか」^[16]がそれである。この資料は初出の媒体を直接確認できない点で信頼性に瑕疵があるが、極めて具体的な証言が謹直に記録されており、内容の概略は十分信頼に値する。それによると、

一九七八年四月二六日、林辰先生のおごりで江蘇餐廳での昼食をともにした。席上、林老〔林辰〕が言うには、孫伏園が彼に次のように言ったという。「私の失恋」は当時盛行の失恋詩に対してのものだったが、直接の導因は徐志摩と林徽因の愛情のもつれである。・・・〔中略〕・・・徐志摩は林徽因に対する恋に苦しんでいたが、畢竟商人家庭の出身で、祖父が翰林、父が高官を務めたことのある林徽因とは家柄が釣り合わず、しかも年齢差、離婚歴もあったので、最後は失恋で終わった。・・・〔中略〕・・・劉勉己は徐志摩の同郷で友人で、徐と林の間の恋情を知っていたので、「私の失恋」に対して特にセンシティブで、特別タブー視した。・・・〔中略〕・・・魯迅は当時ちょうど『晨報副刊』に訳文の「苦悶の象徴」を連載し、その他の作品も発表していたが、劉勉己はいずれ〔の掲載〕にも異議はなく、ただ「私の失恋」という詩だけは掲載を許さなかった。・・・〔中略〕・・・林辰先生は著名な文学史料専門家で、孫伏園先生との交際は親密、学問はかねてから厳格謹直をもって知られるので、当然、彼が一編の物語をでっち上げて昼食の話の種にしたはずはない。孫伏園先生はこの文壇の騒動の当事者であり、彼の説は当然一次資料であって、重視するに値する。林辰

先生のこの談話は、私は当日夜すぐ整理記録を作成したので、三〇年後でも正確に祖述できるのである。

伏園は一九六六年に死去しているので、林辰は伏園が生前彼に聞かせてくれた話を一九七八年に陳漱渝に伝えたということになる。林徽因の名を上げている点はもちろん、「失恋詩盛行」説と徐志摩・林徽因の恋情との関係を明示している点、劉勉己が「私の失恋」を抜き取った理由にさらに一步踏み込んだ説明を加えているなど、この伏園の証言の方が席珍の証言よりさらに具体的である。録音記録ではないので、いずれも陳漱渝が伏園の実際のことばを補正している可能性は十分あるが、謹直な陳漱渝のことだから概略に誤伝があるとは思えない。この証言は、劉勉己が伏園に言ったという「私の失恋」は「[[ひどくて]ほんとうに我慢できない [實在要不得]]」ということばのいい注釈になる。つまり、劉勉己は徐志摩の親密な友人として徐志摩の恋愛事情を知悉していたので、「私の失恋」が徐志摩の林徽因への失恋を嘲弄していることがわかり、そんな「私の失恋」をどうしても許せなかったのだろう。そしてこのことは、魯迅と孫伏園の共通理解になっており、だからこそ、魯迅は自分の書いた「私の失恋」が伏園失職の導因になってしまったことに格別の申し訳無さを感じていたのである^[17]。

劉同様徐志摩の友人であった陳源も魯迅の「私の失恋」が徐志摩を風刺したものだと認めたと伝える資料がある。一九三二年に公刊された楊昌溪「魯迅が徐志摩を風刺 [魯迅諷刺徐志摩]」^[18]である。

北方の友人の言うには、孫伏園が以前北京の『晨報』副刊を編集していた時、魯迅に文章を書かせて誌面に箔をつけていた。魯迅は催促されて、戯歌「私の失恋」一首を作って出したところ、印刷時に、研究系の経営者が見て、この詩は徐志摩を風刺するために作られたものだと断固とし

て掲載させなかった。・・・[中略]・・・徐志摩は当時ちょうど林長民の娘林×音を追いかけていたが果たせなかった。後に陳西滢〔陳源〕もこの詩を見て徐志摩を風刺したものと認めた。

「研究系の経営者」とは劉勉己、「林×音」はもちろん林徽因のことを指している(林徽因の原名は林徽音)。陳源も徐志摩のすぐ近くにいたので「私の失恋」が徐志摩を風刺していることがわかったのであろう。

五 失恋詩としての徐志摩「去るがいい〔去罷〕」^[19]

上掲の陳漱渝は、徐志摩が翻訳したローズ・マリー (Rose Mary) 作「明星と夜蛾〔明星與夜蛾〕」^[20]が、実は翻訳を装った自作で、これが魯迅「私の失恋」の風刺対象だった可能性を示唆している。しかし、これが表現している内容は失恋ではなく、むしろ熱い恋情なので、魯迅がこれを徐志摩作の失恋詩と見なした可能性はほぼ無い。それとは別に、複数の研究者から徐志摩が書いた失恋詩だと指摘されている作品がある。それが「去るがいい〔去罷〕」という四段の詩である^[21]。「去るがいい、世間よ、去るがいい！〔去罷，人間，去罷！〕」で始まり、「去るがいい〔去罷〕」を計十六回連呼し、「青年時代〔青年〕」、「夢郷」、「様々なこと〔種種〕」、「すべて〔一切〕」に対して、去るがいい、行ってしまえ！と言い放つ。この詩を読むと、挫折、絶望等に見舞われた青年の痛切な心の叫びが伝わってくるが、必ずしもそれが失恋の叫びとしては明示されていない。しかし、当時の徐志摩が実際に失恋して失意の底にあったということを下敷きにして読むならば、失恋の痛手を率直に表出した詩としてしか読めなくなる^[22]。

上述の複数の証言などから、徐志摩が林徽因に失恋したという噂は当時から諸方面に流布していたことがわかる。梁錫華『徐志摩新伝』^[23]によれば、タゴールの秘書 Elmhirst は、徐志摩とはタゴール来華前からの旧知の間柄で、林徽

因との苦恋についても徐本人から聞かされていたと言う。一九二四年四月から北京に滞在していたタゴールは、同年五月二〇日夜に北京滞在を終え北京西駅を出立したが、Elmhirst を含むタゴール一行を見送る人々の中に林徽因がいた。タゴール一行に随行するため車中にいた徐志摩は、見送りに来ていた林徽因宛の手紙を走り書きしていたが、書きかけのまま発車となり、その走り書きを Elmhirst が保存しておいたらしい。梁錫華はイギリス在住の Elmhirst からそれを入手、その書跡を当該書に掲げている。その文面には三日前つまり一九二四年五月一七日の晩に決定的な失恋を思い知ったことが暗示されている。その時に林徽因から、後に夫となる梁思成とともに彼女が翌月アメリカ留学に出発することを知らされていた可能性が高い^[24]。

Elmhirst によれば、林徽因が梁思成とともにアメリカに出立したあとも、徐は林に恋々としていたと言う。徐の林に対する恋情は一貫してはっきりしていたらしく、また徐と林は接触も多く、実は関係も良好だった。しかし、後に結婚する梁思成と林徽因あるいは両父（梁啓超と林長民）両家間の太く深い関係の前に、徐志摩は微妙な苦恋状態を強いられたようである。そして彼は親しい友人には、ほとんど自らの恋を包み隠すようなことはしなかったらしい。結果、徐の林に対する失恋は「北京の文芸圏」内で「公然の秘密」のように囁かれるようになっていたと想像される。それをもとに魯迅を含む孫伏園のサークル内では、「去るがいい」は徐志摩の傷心を表現する失恋詩として読まれた可能性が高い。ただ、以上で確認してきた証言者は、誰も徐志摩の詩「去るがいい」には言及していない。証言者達にとってこの詩は印象に残る詩ではなかったのだろうか。

六 徐志摩「去るがいい」と魯迅の『野草』

実は魯迅だけは他の証言者と違った。彼は『野草』の中に、この「去るがいい [去罷]」という詩のモチーフと詩句そのものを、密かに埋め込んでいる。

一つが「私の失恋」の末句、もう一つが、「野草・題辞」^[25]の末句である。このことは、“去罷”という詩句が短く単純なためだろうか、管見の限りでは、かつて誰にも指摘されてこなかった^[26]。

「私の失恋」の全四段の語りのパターンは同じで、次の五段階が繰り返される。

- 一. 「私」は彼女がいるところに行けなくて涙を流す
- 二. すると彼女は恋人向けのプレゼントを贈ってくれる
- 三. そこで「私」はおよそ恋人向けとは言えない物を返礼に送る
- 四. すると彼女は「その後がらりと態度を変えて相手にしてくれない」
- 五. 「私」にはそれが「なぜだかわからず」、そのことが「私」を困らせる

このうち五. については、第一段「私をびくびくさせる」、第二段「私をうつろにさせる」、第三段「私を神経衰弱にさせる」と来て第四段だけパターンが違う。第四段だけはダッシュ「—」が入って、「私を～させる」のではなく、“由她去罷”と「彼女」が離れ、去るに任せる、といった意味の文句になる。それを、竹内好（1976）を始め片山智行（1991）、丸尾常喜（1997）は、まるで作中の「私」が開き直って彼女に言い放ったかのように、「勝手にしろ（!）」という日本語に翻訳している。しかし、それで失恋詩（の盛行）をからかったことになるだろうか。それでは風刺としてあまりに迂遠だし、「意図して[故意]」という魯迅（1930）の言い回しを閑却している。

思うに、ダッシュ以降は、作中の「私」ではなく、作者魯迅が、超越的に作中の「私」の発話権を奪って諧謔を弄しているのである。つまり決定的な最後の決り文句“由她去罷”の語り手は作中の「私[我]」ではなく、作者の魯迅であって、最後のこの句だけ突然作者の異質な声が響いているのである。作中の「私」がトンチンカンな返礼をして彼女に相手にされなくなってもその理由がわからず悲痛な思いを訴えることに対して——「彼女」が去るに任せては

どうだと——作者が外野から意地の悪い冷笑を浴びせかけているのである。もしそうだとすると、この揶揄は、徐の「去るがいい」が、心を寄せる林徽因が自身から去ることになった傷心を悲痛な調子で詠ったことに対する揶揄と同じ韻を踏んでいることになる。孫伏園、孫席珍二人が揃って証言しているのだから、梁思成と婚約した林徽因に対して家柄が格下で離婚歴のある徐志摩がいくら恋慕しても相手にされないといったことも魯迅はふまえていたのではないだろうか。少なくとも魯迅は、徐志摩の「去るがいい [去罷]」の主旨を的確に読み取り、その中で印象的に連呼されタイトルになった“去罷”という詩句を、自作の中にそのまま組み込んで、言わば遊んでいるのである。そう解釈しないと「私の失恋」が何を風刺しているのか鮮明にならないし、なぜ劉勉己が頑なに掲載を拒否したのかも理解できない。

ただしこの魯迅の遊びは、魯迅にとって真剣な遊びだったと言うべきだろう。そのことは、『野草』という連作全体を締めくくる「野草・題辭」の最後の最後に、

去るがいい、野草、私の題辭とともに！ [去罷，野草，連着我的題辭！]

と再度“去罷”という詩句をそのまま使っていることから窺うことができる。なぜこの決定的な箇所では魯迅は「去るがいい」を最適なことばとして選び取ったのか。それはやはり、自分にとって深い愛着のあるものが自分から去っていく傷心を自虐的に癒そうとした徐志摩の「去るがいい」にひっかけたかったからであろう。「世間」や「夢郷」等に「去るがいい！」と言い放った徐志摩は、しかし、林徽因に対するのとよく似て、結局はそれらを尊重し愛惜する態度を捨てきれなかった。魯迅は、それに対して、愛着ある自分の「野草」たちへの未練を敢然と断ち切ろうとした。

七 魯迅にとっての徐志摩

連作の総題として、日本語の「雑草」に当たる“野草”ということばを選び取った魯迅には、言わば雑草魂があった^[27]。『野草』連作中に書かれた「『華蓋集』題記」^[28]には以下のような表白がなされている。

私は幼い時空を飛ぶことを夢想したことがあるが、今もまだ地上にいて、
小さな傷の手当をすることもままならない

〔私は〕 ちょうど水に濡れた小蜂のように、ただただ泥の上をじたばた
するだけ

私は風沙の中を転げ回って生きてきた

彼はさらに「やはり砂漠に立って、飛ぶ砂転がる石を見ながら、楽しければ笑い、悲しければ叫び、憤ればどなり、たとえ砂や石が当たって全身ががさがさになり、頭から血が流れても、いつも自分の固まった血を撫でながら、模様があるようなものくらいに考える」のが自分だったと言う。そうなることで自分の「魂」が「荒廃」し「粗雑」になっても、そのことを憚らないし隠そうとも思わない、そればかりかそれらを愛してさえいる、と記している。『『華蓋集』題記』のこうした表白は「野草・題辞」の主旨と重なるところが多い。『『華蓋集』題記』での魯迅の自己像は多分に、一九二五年五月末以降激しく敵対した陳源ら「洋館に住む通人」「正人君子」たちとの間の政治的文化的闘争を反映しており、その時期は『野草』連作時とかなりの部分で重なる。

徐志摩は、魯迅の最大の論敵であった陳源のイギリス留学時以来の友人で、二人は帰国したあとも同じ舞台をいっしょに観劇するような仲だった^[29]。中でも活躍が華々しかったのが徐志摩で、一九二三年頃から劇評や映画評を次々

に発表して新興芸術に対する見識を示し、欧米留学者や「高貴な紳士たち」の人的ネットワークを使って、海外の劇団の舞台を北京で実現させたり^[30]、世界的なバイオリニストに中国人向けのコンサートを開催させたりした^[31]。もちろん文芸評論や詩文を様々な雑誌に発表して文壇での大きなプレゼンスを確立しつつあった。

彼らが「北京の文芸圏」に対して特に衝撃を与えたのは、おそらく演劇評論においてであろう。徐志摩と陳源は、ロンドンやパリの舞台を観て回った目の肥えた演劇批評家でもあって、欧米の劇団の公演や北京滞在中の欧米系の演劇人による演出・出演の英語劇を継続的に観劇し劇評を発表した^[32]。それと同時に、多くの五四文化人の京劇に対する偏見を尻目に、梅蘭芳等の京劇役者の厳しい訓練と優れた表現力を高く評価した^[33]。そうした活躍の一方で、魯迅と同一サークル内にいた陳大悲のゴールズワージーの脚本の中国語訳の誤りの数々を、陳源は完膚無きまでに批判し^[34]、イブセン「人形の家」を上演した北京女子高等師範学校の舞台を観劇途中に席を立ったことで暗に批判された際には、徐と陳の二人は、観劇には快楽が必要だとする冷徹な演劇論を逆に突きつけて、陳大悲等が関与していた国内のアマチュア「愛美」演劇運動に冷水を浴びせかけた^[35]。

魯迅が初めて直接徐志摩に言及するのは『語絲』第五期（一九二四年一二月一五）に発表した「『音楽』？」である。魯迅の「秋夜」（『野草』第一篇）が掲載されたのと同じ『語絲』第三期（同年一二月一日）に、徐志摩のボードレールの訳文が掲載されており、「『音楽』？」は、その訳文前言の神秘主義的な文学音楽論^[36]に対する反発を表出したものである。魯迅は後年以下のように記している。

私は実のところ新詩を作るのは好きではないが——古詩を作るのも好きではないが——ただそのころ〔五四運動時期〕詩壇が寂しい状態だっ

たので、いっしょになって賑やかに囃し立てただけで、詩人だと称するの
 が出てきたらすぐ足を洗って作らなくなった。私は徐志摩のような詩が好
 きではなかったが、彼はいたるところに投稿することを好んで、『語絲』
 が出版されるや彼もやってきた。彼に賛成する者もいて掲載されたので、
 私はすぐ一篇の雑感を書いて、彼が来ないようにちょっとからかってやっ
 た。果たして彼も来なくなった。(『集外集』序言)^[37]

この中に出てくる「一篇の雑感」というのが「『音楽』？」である。『集外集』
 の序言でこのようなことが書かれているのは、この文集に彼の五四運動時期に
 書いた昔の詩作とともに「『音楽』？」が収録されているからである。魯迅はこ
 の序言の中で、自分の過去の著述を見直して、自分の幼稚さに驚いたと記すが、
 「どうしようもない、確かにそれらは自分が書いたものだ」と達観したうえで、
 ダッシュを引いて中国語で“——由牠去罷”(それらが文集に収められて公刊
 されるのに任せる)と記している。「私の失恋」の最後の“——由她去罷”の“她”
 を“牠”に替えただけで、全く同じ文句、同じ表記である。これは偶然だろうか。
 やはり魯迅は「『音楽』？」を読み返して、徐志摩だけではなく、徐の「去るが
 いい[去罷]」と自作「私の失恋」とその結句“——由她去罷”をありありと思
 い出していたのではないだろうか。ここでも彼は「遊んで」いるのではないか。

徐志摩が詩の精髓は字義よりも音楽性にあるという文学音楽論を書いたのに
 対して、「『音楽』？」の最後で魯迅はスズメのさえずりも音楽だとしたうえで、
 こう締めくくった。

ただ一声発するだけで人々が大抵震え上がるミミズクの真の悪声はどこ
 にある!?

この一文から当然想起されるのは、『野草』第一篇「秋夜」の前半と後半を

深刻に中斷する次の詩句である。

ホウと一声、夜に飛び回る悪鳥が飛んでいった。

このあと「秋夜」の中の「私」は笑い声を聴くがその笑い声が自分の口から出ていることに気づいて庭から自室へ戻るのが、「『音楽』？」の最後の文句に、「秋夜」のこの詩句が明らかに響いている。これを単なる偶然と考えないならば、魯迅が「秋夜」を書いた一九二四年九月時点で、徐志摩の詩を中心にした文芸活動に対する反発がすでに魯迅の中にあり、その反発心がミミズクのような「悪鳥」のイメージとして像を結んでいたと想像することができる。

この時期の魯迅は中国の新詩の生育に強い関心を持っていて、斬新な詩的表現が中国に生まれることを切望していた^[38]。そこで心ならずも自ら着手した「秋夜」の中に「悪鳥」が意味深な登場を果たすことになった。ただ、彼自身にすでに確かな手応えがあったわけではなく、「秋夜」「影の告別」「乞い求める者」は書かれた後二ヶ月程度手元に置いておかれた。大きな影響力を発揮しつつあった徐志摩に対する反発が、このころから魯迅にあったことはほぼ確実に、「私の失恋」も、単に徐志摩の失恋というゴシップを興味本位にからかったのではなく、徐志摩の文芸活動や存在自体が発する様々な社会的意味やニュアンスを根底的に揶揄しようとしたものだったと考えるべきであろう。

二一世紀現在から眺めると、徐志摩の文芸活動は、当時彼が置かれていた条件下においては極めて正当で、誠心誠意粉骨砕身努力した尊い営みであったと言うべきだろう。また、彼は陳源のような酷薄な物言いをするのではなく、無邪気な、どちらかという人当たりのよい好人物でもあった^[39]。そんな徐志摩に対する嫌悪を堂々と公言した魯迅の心理はおそらく以下のようなものだったと私は想像する。

ものを言ってそれを嫌がる人がいたら、何も反応がないよりは、やはり幸福だ。この世には居心地の悪い思いをしている人々が大勢いるのに、専ら自分にだけ快適な世界を一心不乱に作っている人たちがいる。そんなうまい話があつてなるものか。彼らの面前に嫌なものを少しでも置いてやり、時には居心地の悪い思いもさせ、自分の世界もなかなか円満にはいかないということを思い知らせてやる。(『墳』題記)^[40]

なかなか度量の狭い意地の悪さだが、魯迅にとってそんな自分の性分は百も承知のことだったろう。「専ら自分にだけ快適な世界を一心不乱に作っている人」と書いた時、彼の脳裏にまずあつたのはおそらく徐志摩だったろう。

八 終わりに——現実を忘れられない自作冷笑衝動

さて、「私の失恋」をきっかけに孫伏園晨報社辞職事件が発生、孫伏園を通じて『晨报副鐫』に投稿していた魯迅、周作人等は、自由な発表の場として同人誌『語絲』を創刊した。その機に当たって魯迅は、「野草」というキーワードを掴みとって連作を構想、手元に取っておいた「秋夜」を『語絲』第三期に「野草の一」として発表した。次の第四期に第二、三篇として「影の告別」、「乞い求める者」を発表したのはその構想の延長上にあつた。その時、斬新で自律的な作品世界を表現していたそれらとは明らかに異質な「私の失恋」をあらためて「野草」の第四篇として同時に発表した。この時魯迅は「野草」のコンセプトの仕切り直しをしたはずである。彼自身も「私の失恋」が「秋夜」「影の告別」「乞い求める者」のような自律的な作品世界を作り上げているとは思っていなかった。でなければ、そもそも匿名で『晨报副鐫』に早々と投稿などしていない。しかし彼にはおそらく、自ら作り上げた自律的な作品世界に対して、現実社会の状況を突きつけることで、混ぜ返して冷笑したくなる衝動が抜き難くあつた。一九二二年の小説「不周山」^[41]の中に戯画化した道学家の姿を書き

込んだのは、彼がそうしたメタレベルからの冷笑衝動を自覚する契機になっただろう。現実社会の徐志摩的なものを冷笑し徐志摩の失恋詩の「去るがいい」という詩句を弄んだ「私の失恋」は、『野草』第一篇から三篇までの自律的な作品世界を混ぜ返しそれらをさらにメタなレベルから冷笑していると言えないだろうか。『野草』には他にも「私の失恋」同様自律的な作品世界を構成していないように見えるものが散見される。例えば、「犬の反駁」^[42]（第一三篇）や「立論」^[43]（第一七編）はその種の詩篇に当たるのではないだろうか。「死後」^[44]（第一八篇）の諧謔にもその雰囲気がある。

つまり、現実を忘れられない、メタレベルからの自作に対する冷笑衝動は、自身の雑草魂の不可欠な一部分なのだとこの時魯迅は思い至ったのではないだろうか。「私の失恋」はそのかなり忠実な表現になっている。おそらく魯迅は、「秋夜」と同じ誌面に掲載された徐志摩の神秘主義的な文学音楽論を目の当たりにして、「『音楽』？」を発表するより先に、手の込んだ諧謔を弄して徐志摩の失恋詩を揶揄した——そのために『晨报副鐫』への掲載を拒否された——「私の失恋」を、俄然発表しなくなったのだろう。そしてそのような自身の冷笑衝動は「野草」の連作を維持継続するのに十分な動力源の一つになり得るという自信も持てたのであろう。そう考えて改めて「私の失恋」を『野草』の中の一つとして発表したのではないか。

この、現実を忘れられない、メタレベルからの自作に対する冷笑衝動は、おそらく「不周山」で最初に自覚されたあと、『野草』の一部に不可欠の要素として取り込まれた。その後、彫りの深い復讐譚「眉間尺」^[45]でも、壮絶な復讐劇が終わったあとに、戯画化した国王周辺のドタバタ劇を長々と付け加えている。これは自作の復讐劇に対する冷笑に他ならない。このような自作に対する冷笑は、『故事新編』の諸篇を執筆し取りまとめるその後の過程で大きな展開を見せることになる。魯迅が後に言う“油滑”^[46]である。

注記

- [1] 本稿は、伊藤徳也「魯迅『野草』連作の最初」（『九葉読詩会』第六号、二〇二一年年三月）の内容を補足、修正し、さらに大きく発展させたものである。
- [2] 片山智行『『野草』全釈』（平凡社東洋文庫、一九九一年）
- [3] 木山英雄「『野草』的形成的論理ならびに方法について——魯迅の詩と“哲学”の時代」（『東洋文化研究所紀要』三〇、一九六三年）
- [4] 傳田章との共著『言語文化研究2 中国の言語と文化』（放送大学大学院教材）（放送大学教育振興会、二〇〇二年）木山英雄担当部分
- [5] 丸尾常喜『『野草』の研究』（汲古書院、一九九七年）
- [6] 孫玉石《〈野草〉研究》（北京大学出版社、二〇〇六年再版／中国社会科学出版、一九八二年初版）とあと一つは、孫玉石《现实的与哲学的：魯迅〈野草〉重释》（上海书店出版社、二〇〇一年）である。
- [7] 秋吉收「魯迅『野草』誕生における“批評家”成仿吾の位置」（『野草』第九六号、二〇一五年）、秋吉收『魯迅 野草と雑草』（九州大学出版会、二〇一六年）からの示唆を受けた。
- [8] この「失恋詩」盛行説については、伊藤徳也「魯迅『野草』連作の最初」（『九葉読詩会』第六号、二〇二一年）で簡単に論じたが、詳しくは伊藤徳也「魯迅と失恋詩」（『九葉読詩会』第八号、二〇二三年、掲載予定）参照。
- [9] 魯迅《我和〈語絲〉的始終》（《萌芽月刊》第一卷第二期、一九三〇年二月一日／一九二九年一月二日二日作
- [10] 「私の失恋」は、最初三段だったのではなく、もともと四段だったということに関しては、閔抗生《地獄辺沿の小花——魯迅散文詩初探》（陝西人民出版社、一九八一年）の《我的失恋》の項目附載《关于本诗原稿几个问题的探讨》が、当時本作を校正した孫席珍に問い合わせることなどまでして詳しく考証している。魯迅はこの時、発表過程の話と彼個人の創作過程内での話（第四段を最後に作って完成させたこと）を混線させてしまったのではないか。
- [11] 孫伏園《京副一週年》（《京報副刊》第三四九号、一九二五年一月五日）では“他只是吞吞吐吐的，也說不出何以「要不得」的緣故來”と表現されている。孫伏園（子禾記）《魯迅和当年北京的几个副刊》（《北京日报》一九五六年一月一七日）では“刘勉己又跑来说那首诗实在要不得，但吞吞吐吐又说不出何以“要不得”的理由來”。
- [12] 孫席珍《魯迅诗歌杂谈——读魯迅先生几首诗的一些感想和体会》（《文史哲》一九七八年第二期）。なお、注1拙稿がこの文章をCNKI論文データベースで確認できないと記しているのは誤り。
- [13] 倪墨炎《魯迅〈我的失恋〉“新解”质疑》（《文史哲》一九七八年四期）、張自強《〈我的失恋〉新证》（《魯迅研究資料》二一、一九八九年）等。なお、注1拙稿において、丸尾常喜『『野草』の研究』（汲古書院、一九九七年）が張自強論文の書誌情報を示していないと記したのは誤り。
- [14] 孫席珍《魯迅先生怎样教导我们的》（《魯迅誕辰百年紀念集》，湖南人民出版社、一九八一年）。この執筆日は一九八〇年一月二日。
- [15] 孫席珍は、一九二四年一月二九日に魯迅のもとを訪れ『京報』の『文学周刊』のための寄稿を依頼し、魯迅はその際交わした中国の詩壇についてのやりとりをきっかけにして年明け

- の元日に『詩歌之敵』という評論を書き、それが『文学周刊』第五期（一九二五年一月一七日）に掲載された。その中で魯迅は、孫席珍をカギカッコ付きで“詩孩”と記している。
- [16] 陳漱渝《魯迅緣何写〈我的失恋〉》。初出未確認。この文章の出典は、詞典網というサイトの無署名記事《魯迅行书新体诗〈我的失恋——由她去罷〉》(<https://www.cidianwang.com/shufazuopin/xiandai/440495.htm>)によれば、中国人民政治協商會議の機関紙『人民政協報』。発行年、号数等は不明。内容から二〇〇八年頃に書かれたものと推定される。陳は、中国人民政治協商會議の第九期（一九九八年～二〇〇三年）と第一〇期（二〇〇三年～二〇〇八年）の全国委員会委員だったので、掲載誌と執筆時期は陳の経歴と符合する。
- [17] 注9の魯迅の文章に“我很抱歉伏園爲了我的稿子而辭職，心上似乎壓了一塊沈重的石頭”と記されている。
- [18] 楊昌溪《魯迅風刺徐志摩》（楊昌溪編《文人趣事》、上海良友圖書公司、一九三二年）は《魯迅研究学术论著资料汇编 1913-1983》第一輯（中國文联出版公司、一九八五年）に収められている。
- [19] 徐志摩《去罷》（《晨報副鐫》一九二四年六月一七日）
- [20] Rose Mary 著・徐志摩譯《明星與夜蛾》（《晨報五週年紀念增刊》，一九二三年一月一日）
- [21] 邱煥星：《魯迅与徐志摩：新知識階級的后五四分裂》（《中國現代文學研究從刊》二〇二一年第一〇期）、冯肖华《真灵性与逝水情的诗化律动——徐志摩爱情诗的情感脉络》（《河北师范大学学报 / 哲学社会科学版》第三七卷第一期，二〇一四年）、高文翔《在失望与怀想的交织中窥见光亮——徐志摩涉林徽因情事诗作补遗》（《曲靖师范学院学报》第三九卷第一期，二〇二〇年）等。また、webの中国作家網に二〇〇七年一月一日付で掲載された韓石山の講演録《魯迅是新文化运动的主将吗？》（山西大学中文系での講演は二〇〇三年一月八日、二〇〇四年二月一〇日補訂）も徐志摩の《去罷》を失恋詩と断定している。
- [22] 詳しくは、伊藤徳也「北京のタゴールと徐志摩、林徽因——魯迅「私の失恋」の背景を探る」（『周作人研究通信』第一三号、二〇二二年）参照。
- [23] 梁錫華《徐志摩新傳》（聯經出版事業公司、一九七八年初版）
- [24] 注22 拙稿参照。
- [25] 魯迅《野草》題辭》（《語絲》第一三八期，一九二七年七月二日）一九二七年四月二六日作
- [26] 私が、二〇二一年三月の拙稿で最初に指摘した。わずかに遅れて、前掲注16の邱煥星も《我的失恋》と徐志摩の《去罷》の呼応関係を指摘したが、邱は《去罷》と《野草・題辭》との関係には言及していない。ただし、本稿は資料搜索の面で邱煥星論文から多くの示唆を得ている。
- [27] 「雑草」のイメージには、無価値あるいは有害という面と強靱な生命力があるという面の二面性がある。伊藤徳也「魯迅《野草》のタイトル命名の心境—秋吉收『魯迅 野草と雑草』に触れて」（『周作人研究通信』第八号、二〇一八年）参照。このテーマについては、秋吉收『魯迅 野草と雑草』（九州大学出版会、二〇一六年）からの示唆を受けている。
- [28] 魯迅《華蓋集》題記》（《華蓋集》，一九二六年）一九二五年一月三日作
- [29] 伊藤徳也「耽美派と対立する頹廢派——一九二三年の周作人と徐志摩、陳源」（『周作人と日中文化史』勉誠出版、二〇一三年、所収）参照
- [30] 注29 拙稿参照

- [31] 注29 拙稿参照
- [32] 一九二三年の徐志摩、陳源による演劇批評、映画批評については注29 拙稿参照。また、陳源は一九二四年冬以降《現代評論》誌上のコラムでしばしば劇評を発表している。
- [33] 注29 拙稿参照
- [34] 西滢〔陳源〕《高斯倭綏之幸運與厄運——讀陳大悲先生的〈忠友〉》（《晨報副鐫》一九二三年九月二七日～三〇日）
- [35] 注29 拙稿参照
- [36] 徐志摩訳《死屍》（《語絲》第三期，一九二四年一月一日）
- [37] 魯迅《集外集》序言（《芒種》第一期，一九三五年三月五日）一九三四年一月二〇日作
- [38] 注1 拙稿参照
- [39] 例えば周作人《志摩紀念》（一九三一年一月一三日作、《看雲集》所収）、注23 梁錫華《徐志摩新傳》参照。
- [40] 魯迅《墳》題記（《語絲》第一〇六期、一九二六年一月二〇日）一九二六年一月三〇日作
- [41] 魯迅《不周山》（《晨報四週紀念增刊》、一九二二年一月一日）一九二二年一月作
- [42] 魯迅《狗的駁詰》（《語絲》第二五期、一九二五年五月四日）一九二五年四月二三日作
- [43] 魯迅《立論》（《語絲》第三五期、一九二五年七月一三日）一九二五年七月八日作
- [44] 魯迅《死後》（《語絲》第三六期、一九二五年七月二〇日）一九二五年七月一二日作〇月作
- [45] 魯迅《眉間尺》（《莽原》第二卷第八、九期、一九二七年四月二五日、五月一〇日）一九二六年一月〇月作
- [46] 魯迅《故事新編》序言（《故事新編》、一九三六年）一九三五年一月二六日作